

いつの日か

結城 文

いつの日か思い出すだろう

この山桃の並木道を――

冬の日はこのもりと暗く

緑に押し黙って

梅雨の頃には

赤紫の実を路にまき散らした

路ゆく人に踏まれ

心の痣のような染みを印した

いつの日か思い出すだろう

この山桃の並木道を

夏の日

くつきりと木蔭をつくって

強い陽射しから私をかばった

いつの日か思い出すだろう

この山桃の並木道を

とある春の日

葉むら深く

巣作りした鳩の

くぐもった啼き声を

駅へと急ぐ私に聞かせた

おお 帰らない日々の――

ノスタルジ―は

人のもつ

もつとも高貴な感情といたたのは

ロシアの音楽家だったろうか？

忘却に沈みゆく日々の

いつの日か思い出すだろう

この山桃の並木道を